近世名家書画談二編

二

近世名家書畫談二編卷之二目次

○畫妙の奇恠ハ寓言なる事
○文字ハ以て圖畫とせし事
○方西園冨嶽を寫せし事
○唐婦尺牘
○伊孚九の名の事
○三酸圖誤りの事
○春畫火災を除るとする事
○漢土浮世繪師の事
○英一蝶女達磨の圖

秋月文庫

○應舉寫生ふ妙技得〳〵事
○古技稽（ざきバ畫工ふ杜撰多き事
○第一義施無畏等の額の事
○服元喬畫事
○名工名畫同意の事
○日本扇宋朝ふて稱揚せらるゝ事
○賛澤庵と云事
○探幽齋杉戸の畫の事　附賛辭の事
○蕪村翁書畫戯の記
○守景酔興師畫技媒黷せる事

○宮本武藏畫發明の事
○月舟空ふ轉合の句技聞く事
○蘆雪魚の印の事
○外國人假名技覚〳〵事

近世名家書畫談二編巻之二

雲煙子　安西於菟編次

畫妙の奇怪ハ寓言なる事

後漢の劉褒雲漢狀畫なるを見る者皆熱〻まる北風狀画くを見る者皆寒〻と又名画記に北齊の楊子華馬を壁間に畫くに夜〻蹄齧長鳴狀聞とあり此類擧て數〻こゞ〻皆仙家佛氏の寓言より出ることにして其説に惑ハさま〻軽〻〻く信ぜ屬こゝ　此邦にも亦右に等〻き話まくあり淺草寺の繪馬夜毎に出て近村の作毛荒〻るなどの類誠に婦人子狀せく安談と云

屋〻王維が輞川圖を見て病を愈るなどハ吾ハ養神を
つゝ屋きゝ又貘の皮ふ寢て瘟を去り其形を畫して邪を
辟るの類ハ壓勝といふものゝ如して繪馬の奇異をとなゝる妄
談と混ぜ屋べし

譚子化書云孝楓化為羽人自無情而之有情也
賢婦化為貞石自有情而之無情也と是ゝ寓言な
るべし　此邦の松浦佐夜姫の望夫石とかゝるとハ此
此言なのゝ出るゝものゝ因ふ云此比桂川雲臣君が
随筆を見しふ浅草繪馬の落款を載て所提筆と
ゝ記せり　望夫石の本事ハ劉義慶の幽明録ふ出るとゝ

文字を以て圖畫とせし事

南畝翁説ふ世ふ劍ふ乗まる仙人の圖を上利劍といハ
誤りなりこゝハ呂純陽の海を渡る像なる屋し　詩話
類編ふ王文恪が純陽渡海の圖ふ題して扇作ふ斬ふ劍
作舟と書るゝよし見ゆまハ純陽なること明らふて列仙
傳の鍾離權とハ大ふ異なるさまゝ香祖筆記ふ陳仲
醇云漂陽人家有鍾離權畫花押如一劍狀則是神
仙亦有押字とゝのまハ上利劍の名の誤りハ是より出る
なるべしと云り按るふ二幅對ふ一僧衣を縫圖こゝを
朝陽と云又一僧月下ふ誦経のさまを是を對

月と云傳へ（爲まどいうなる祖師といふ）ものなり
こゝハ祖師の名ゝ（ぞ）して古人の句ゝ（を）圖せ〜その歌
朝陽補破衲對月了殘經と云句ゝ（を）ハなり　此邦ゝ（の）
和歌の心など（を）圖せ〜そのまゝ（の）和漢同意と云べき
なり　達磨芦葉ゝ（に）乘ぜ〜と云ふ船の事なり詩經國風一葦航之赤壁賦一葦之所如ゝ（の）など皆舟ゝ（を）葦と云是又文字也壽老人ゝ（に）蝙蝠と鹿を添て福禄壽の圖せ〜ハ蝙と福鹿と禄の音通なり又鍾馗ゝ（に）蝙蝠ゝ（を）そ〜ハ降伏の伏と蝙の音通なるべ

方西園富嶽（を）寫せ〜事

理齋歸路日記ゝ（に）云安永の頃ゝ（に）や唐船一艘房州（に）漂着せ〜事ゝ（に）その以ゝ（に）来商せる唐人ハ猶長崎ゝ（に）ゐる者かの漂着せ〜唐人ハ初て日本の富士（を）見て甚よろこび〜ゝ（に）

彼船ゝ（に）乘渡り〜方西園といふる者畫（を）善せりよりて（まの）
ゝ（に）り富士（を）寫〜て國ゝ（に）帰まるゝ人〜競て富士の景（を）
り依て今ゝ（に）方西園ゞ富士ハ人〜珍重するなりと云
理齋ハ唐土（に）漂流せ〜人ゝ（に）て彼ゝ（に）ゝ（て）ハ人〜この方西園
ゞ富士（を）賞玩すること（を）まのゝ（に）り見る人なり　此邦
ゝ（に）ても唐人の圖せ〜彼土の名山勝蹟の圖ハ尤賞玩せ
ざることゝ（に）そ因ゝ（に）云谷寫山ゞ摸せ〜漂客奇賞圖と
云一卷あり是方西園房州より崎陽（に）護送せ〜る道
路見る處の真景なりよき山水の手本なるべ〜近来
京畫師在中ゞ画〜富士寫真圖（を）見〜ゝ（に）ハ賛永山（を）

雪樓
漁夫
縮寫

唐子
秋九
月
寫於
重
九前
三日
西園
濟□□

見せられ是東海道西方より望見るの図なり東海道東方江戸より箱根にうつりまでよりて望見る時ハ彼山見ゆ西ハ富峯景ハ東方より望所を写せ〻きなり山水四君子園などなまり書もぎ多るハ却て画格ハへらぬ

菜嗣祭曰富士峯ハ写せ者ハ探幽齋ゞ法格ハ效ぶんバ其清趣ハ得ゞるかゝ又常信此真景ハ翫味せ〻事

筆墨ハ歇きうと此ものの図ハ賞せ〻事誠ハ宜なり

唐婦尺牘

南京の商客崎陽丸山の遊君ハなゞ〻て帰ハ遅緩ハなりうきバその婦妻書ハよせて諫免るよ〻其書翰を

通詞其ゆりとひ得て或人ハ贈るその文ハ曰く

荷錢貼水。堤柳鳴蜩。遥想相公與時多福。貴體康泰為慰。茲啟者。自別以来倏経四月有餘。家中翁姑兩大人。玉體全安。無庸掛念也。至于朝夕侍奉左右。妾雖不才。自當留心。其一切諸務。妾自料理。再児輩攻書。雖有先生教誨。然妾亦當日夕勉勵。大女亦安吉。女婿今春闈得第進士。是為萬幸。但妾近聞　相公在崎。迷戀煙花。使妾亦為未信。因相公在家。凡事皆有斟酌。況飄洋渡海。莫不為名

為利。豈反如是耶。妾在家。獨挑寒燈。操持拮据亦莫不為家業計。乞　相公切不可貪戀閑花。以失素守。千祈三思而行。則家門幸甚。妾書中言語。倘有犯冒。猶祈寛宥為感。餘再叙。專此須請

近安

言佩相公清鑑

賤妾淑貞歛衽拜□

六月初七日

書袋

内安信一封致

言佩相公台啓

沈門何氏拜書

同裏

六月初七日潤餘堂

和解

荷葉水ふ浮び堤の柳ふ鳴蜩ひのり遥ふ思ひやりいとり
法元快時と共ふ多福貴體ふ安康なるんと思ひ慰
やれ態〻去免〜やれふ別後ふや四月ひのり就ふ古
内方法両親様ふ平安ふ座遊ばいまを法心かゝ法
陶ぐれ朝夕ふ例まりの古奉ふ我身不才ふ得共隨分
心ふ就つく〜一切の用向をづゝ取計ひ猶又子共なども
学問ふ出精い〜れ師匠の教訓をい得共吾身も又日夜ふ
つと免はげまれ姉娘をいよ〜息才ふて賀ふ事も當
春進士及第ふるゝび所のゝまゝ誠ふ萬幸と存ふ

此頃形りいふ法元検長崎ふて遊君ふまよひむつびる
いよ〳〵吾身もまて〳〵ハ思ひやるいふ法元検屋ど元まてハ
茅の古るふ指引あハ〳〵ま殊ふ難ふさ由よひ海ふ
渡りあハ名の為利の為ふいハ(ハなど古程なるるのおハ〳〵
まーいんや吾身ハ宿元まて獨心細き燈ふかゝげいとなこと
辛苦いゝもぎるひのもかりごとこいハ法元検冷いゝ
なる色ふ迷ひ昔の契り ふ古多ゞひなるまゝ能く古雑
ゝさまいハ家門の幸とないハ文まてゝ上ふ言葉をゝや古氣ふ
肖きい事古産ふ共古ゆるゝ弱りいハ(ハふなふ細ふハ重てゝ上
屋くふ先ハ便りこまるゝ法相體ふ自ふ

伊孚九の名の事

好古日録ふ伊海が父嘗て海外ふ貿易をゝる夜東海
洋中ふして男子生るると夢見て家ふ還まハ男子ふ安
産を即感夢の夜なり故ふ海と名づけ字を孚九と字を
享保十一年廿八番の船ふ乗じて始て長崎ふ来る延享
中ふいゝり廿餘年の間往来をその寫を書画世上ふ賞を
らき最風韻ありと云こ
予按るふ孚九山水風景尤妙大雅池翁も此爰より
南宗ふ入ること技得うと思ふる又四君子ゝの舶来餘
人ふ比をまハ　此邦ふゝること稀なり多く伊孚九と

款字なるものあり或ハ雲水伊人とせ一説見るべ
あり又桴鳩とせ一意説考ふる論語ふ道不行乗
桴浮于海とあるふよりて名ハ海字ハ桴鳩とをせ一ら
又葦野耕父とせ一印説用るハ伊尹の有葦の野ふ耕
せ一と云意ふよるらいづをふを高上の見と思ふる其
人とあり〻て知るべ一或ハ扁工ふ名ある由清人
某氏の筆記ふ見へ〻あり

三酸圖誤りの事

杏園が記ふ云世ふ酢吸の三聖の図といふものありて孝子
孔子釋迦の像説畫ふり按るふ趙孟頫が東坡懿蹟

圖と云をの一巻あり其中ふ云東坡黄門魯直と共ふ佛印
説訪ひ一時佛印云吾桃花酢説得あり甚美なりとを
共ふなを〻て其眉説顰む時の人稱一て三酸とも去るまじバ
東坡山谷佛印をあるやまりて老孔釋といふなるべ一僧横川が
京華集ふ三教吸醋圖詩云翁と乞醋到其鄰聳膊忍
酸寒迫身李白題詩妙於畫舉杯邀月影三人然まじバ
此説より誤り来るら大竹氏家藏明黄應禎臨寫懿蹟圖説見一ふ此事なり異本ふる事も追て可考
按るふ虎溪三笑圖ハ此酸吸ふ類せ一図なり三笑ハ僧
恵遠陶淵明陸脩静とを三人共ふ時代不同なるまじども
後人の作を取合せ一をのなるまじを此類誤りふ似て

ひのやまうざるあり皆古図ふ仿ふて後人の作りしなり
多し

春畫火災を除るとい事

漢書景十三王傳云。畫屋為男女裸交接。置酒請諸父姉妹。飲令仰視画。（廣川王子海陽）とあり春畫こてふ權輿なるら
と覚ゆ青藤山人が路史ふある土人花書甚多し其櫃毎ふ必春画一冊づゝ置り或人その故を問ふ是火災を
よくる厭勝なりと云りとぞ　此邦ふて鎧櫃ふ必春畫を
いるゝと云こといつの比より始りしを未考へず又月宮雪鼎
が傳ふ明和中京師火災ありあるる典舗の倉庫ふ彼雪

鼎が春画あるが為ふ火を除りしこと見ゆ路史の説ふよ
まるふや

漢土浮世繪師の事

五雜俎弟七曰。姑蘇有張文元者。最工美人。俗中之
神仙也と是　此邦の菱川師宣宮川長春西川祐信など
の類なる欲よく人世平生の情態をうつして絶技とい
ふ　今世又京師ふ乗龍江戸ふ國貞ふあり師宣長春
と八異なるまゝどもよく風俗の情態を畫て世の人情を動
うもふ至りしを是又その妙域ふ入まる者ふして得ざ
き技能なり

此風俗の圖は浮世繪此巻よりちなんで時世のさまを記せり

和漢人物を画く者畫格の高き爰ふいとうていまるかぞふるふいとまなけれども仇英ハ　此邦の一蝶舞斧ハ此邦の應挙ゟむのづゝ姓名の文字の似通るゟ奇なりといふべし

英一蝶女達磨の圖

題半身美人圖　解大紳

千般體態百般嬌。不畫全身畫半腰。可怪畫工無識見。動人情處不曾描。

題西施半身像　李笠翁

半紙天香満幅温。捧心餘態尚堪捫。丹青不是無完筆。寫到纖腰已斷魂。

世ゟ美人ハ達磨ゟ畫ハ右の詩などゟより画工の工夫ゟ悟道の意ハ細腰ゟ達磨を畫ハ思ひ一ゟ此涙山崎美成が随筆ハ見ハゟ女達磨といふハ英一蝶が画き初めとぞ昔時新吉原中近江屋の抱半太夫と云遊女ハのしゝが浪ゟ大傳馬町の商家ハ縁付うそ家ゟ人と集りて何くまとゝ　このゝうの序ゟ達磨の九年面壁の話を志ゝるゟこのゝ半ゟ夫きて九年面壁の坐禅ハ何不どのことうなるべき遊女の身の上ゟそ紋日ゟ　その日の心づゝひゟ畫夜見せ紙はること面壁ゟかること有ハ達磨ハ九年ゟまゝハ苦界ハ年なれば

達磨よりも悟道おくりとて笑ひるるとぞ此話ハ一蝶ぶきて
てやゞて身の達磨を傾城の顔ハ画きるるハ世上ハはやり
て扇團扇煙草入などハ女達磨といひるるとゝ市川白
猿その繪の賛ハ

そゝをさん（作麼生）ハ是こなたさんハ誰そ
九年母も粹よりいそ〳〵ひまハ味かな
とゝ白猿題〳〵るとぞ又素外が手引草ハ祇空
九年何苦界十年をなこうつも
と是まゝ面白き句なり何さ尚英一蝶ハ何事ゝも頴敏乃
才ある人ゝて世人の氣ハ知るるも早くゝハ心付〳〵ハ

應舉寫生ハ妙ハ知得〳〵事

應挙寫生の工夫其妙ハ知得ること本朝古今及ぶ者なし
去ゝま共瀑布登鯉図を見るハ鯉魚瀑布の中ハ向ひまバ
登ること知得べゝぞこゝまで登鯉の本意ハ向ハ〳〵ぞと云者ハ
按るハ此図高田敬輔より出て楫取魚彦など專ら画く
変なりその登る所ハ本意ハ向ハ〳〵ぞ共應挙が畫く所ハ其
工夫の妙なる瀑布の中ハ〳〵て形像生るがぬく真ハ登るゞ
如くハ見ゆ應挙ゝとよりて登鯉の図を知るぬハ向ハ〳〵ざる
所なき共新意ハ出〳〵て寫せ〳〵なゝ為とバ王維が袁安
卧雪の宅邊ハ青こゝる芭蕉葉ハ雪ハ知つゝ〳〵せ〳〵ハ如き

同日の談なるべし又幽鬼の圖を寫きゝ知る婢女晩景に
是を見て氣を失ひしこと口碑に傳へありいづくの妙境に
入るぞといふことなし其工夫は壯女の死せる者の面相を見て
畫き初めしと云其真蹟を見るに常の顔面にて眼中に意
なるのみなり又江戸本所押上天羅山真盛寺に應挙が
畫る地獄變相圖なり筆力精神の妙夢幻のうちに
地獄を見るがごとく筆者冥府に至りて帰りしかのと
疑ふる誠に地獄の寫生なるべし又人物花卉鳥獸蟲魚
に至りても実によく生動の態をつくせり是ぞ能手霊
を作りしを又よく実とまがふるものなり韓非子に客有為

齊王畫者齊王問曰畫孰最難者曰犬馬難曰孰易
者曰鬼神最易夫犬馬人所知也旦暮罄於前不可
類之故難鬼神無形者不罄於前故易之也（外儲説左上）とあり
実に眼前に見る所は世俗是を評し上古のこと は學者こゝ
を評せ鬼神にいたりては見る者なき故圖様定まりざ
ま共又拙工の手より出るは有るものゝ心を悚動せるに
いたるぞ

東坡曰余嘗論畫以為人禽宮室器用皆有常形
至於山石竹木水波煙雲雖無常形而有常理常
形之失人皆知之常理之不當雖曉畫者有不知

故凡可以欺世而取名者。必托於無常形者。雖然常形之失止於所失。而不能病其全。若常理之不當則舉廢之矣。以其形之無常。是以其理非高人逸才不能辨

古伝稽(ざき)ハ畫工ヲ杜撰多き事

道家佛説の寓言より図を作りしより或ハ能散樂の系伝寫せしより猩々伝人物ヲ作り張良の龍ヲ騎る類ひ是なり関羽青燈看書圖を今様のごとき本ヲ作るも古昔乃書籍ハ卷物なり魏晋の頃ハ今の佛経の如く折本なり中畳以舉手為率と南史[redacted]ヲ見(又隋書経籍志ヲ零畳

の字あり関羽の看書を折本なるべし今の如きごとき本を胡蝶装とて宋ヲ始ると云又漢以上の人伝画くヲ頭巾幘帽伝服せし図甚多し是又誤りなり漢以上ヲハ冠なりヲ以て頭巾の類ハ無きことも

此邦也を源平戦争の図ヲ鎗ハ作るを畫のるも皆長刀なるなり又兜を不落さまなる者乃頭ヲハ烏帽子作るべし鎗ハ足利家の末より出来なるべのなり此類和漢ともヲかぞへるヲいとまなしまぞ

因云孔夫子常ヲ章甫の冠を戴き縫掖の衣伝着る為まし伝魯公儒服りそいやと問ヲ人ヲ答て曰ヲ魯ヲ居り長して宋ヲ居ハ二國の俗ヲ従ふなるべし

儒者の服とて別ふハ無くいとのさはハしきこそ　此邦に
ことふ似るることなり肥後の藪茂二郎先生大坂の中井
竹山先生ハ初て訪ひし時冬なりしが薄羽織ハ着し
為り竹山先生惟しきていうなるきバ先生ふハ夏衣ハ着る
ものと問ハましふ茂二郎先生答へて國許ハ夏出立
いひしなりこそ其質朴あして知るべし又云高陽山人の
著せし畫談雞肋とつゝものなりよく画家の謬りをと辨
じ給ふバ初学の人披覧して益なる書きなり

第一義施無畏等の額字の事

宇治黄檗山第一義の額ハ高泉和尚の筆なり禪師この

額ハ書せし時弟子大隨和尚傍ふ見居て是ふハ何と是を
見苦しとて凡八十四枚ふ及びつる時大隨便事ふ立り高泉
和尚ハ何まりふ書なるやこそ大隨の居ざる間ふ筆ハ放つて
書きしふ大隨歸り来て大ふ賞し是ぞ山門を鎮守すべき
ものなりとて手ハ打て悦しこそ此額ハ十五枚目ふて成就せしと
東都淺草觀世音堂中正面ふ掛し施無畏の額ハ高天漪
が書きしを是なり是ふ第一義の額ふ等しく是ハ何
のまふハ見苦しとて書しまて何まふ心ふかなハざるを倦こ
つるまして其儘ふ捨長持のうちへ入置しが其後幾程ハ玄
侶病氣づきて卒去せし故門人等長持のうちより見

出〳〵て印章を加へ掛〻〳〵そ其筆妙世人の知る所なり
按るに只書のみにあらず人品も亦勝れる故なるべし

服元喬畫事

南郭先生は元京師の人なり壯年東都に来りて其後
仕へ後徂徠先生の門に入り詩文を以て都下に雷鳴を轟
き共畫事にもすぐれ知らざる者なし按るに
元雪舟流より山水を得たり又花鳥は元見ることなし其
寫せるものを至て稀なり周雪又は觀翁と款字せる有り
又呉款なるあり秋玉山が服翁墨竹記に周雪の款字乃
事は載せ又湯淺元禎が文會雜記に服子没後其書齋の

南郭先生之画

水也石也尺之寸家君画書室壁之一
其洶涌嶔巖者別求之赤水濱
服元雄□

信州櫻井氏藏

壁ふ山水の畫ゐるる絹剥して門生等持去りること絹
記せり又毎年六月廿日品川東海寺中少林院ふて二三
軸絹展觀も　法橋吾山云南郭八山水絹好む癖ゐるる
家ふ居て八至る所の風景絹手づから壁ふ畫き是ふ向て
常ふ愛せらるる又門人肥後の隈本ふ白脩といふる學士
ゐる元喬卒して後夢ふ木曾の山中より来まるこを再
會し往事絹談じ且山川の美絹かたりて一絶絹唱ふ
危峯回合白雲間一路崎嶇不可攀依舊懸崖三百丈臨泉寺裡老僧閒
此事絹書通ふて東都ふ告来る息仲英大ふ感歎し

風體格調他の人の腸ふ出ず誠ふ夫子の靈なるめと會談の
次ふ八時こ語りるるとなるかの晋の羊祜が死して後もそのの
魂名山ふ登るべしといひしもこるる事ふこを臨泉寺も寢覚
山と号も木曾路名勝の地なり

名工名畫同意の事

天明のころ金工の名譽ゐるし長常八類ひなきこ上手なり
應挙まる畫ふ於て上手なるしが智恩院宮家諸大夫樫
田阿波守といふ人長常ふ柄絹彫りてよ應挙ふ下繪絹
かくせんとゐつるこ八長常うけがひ為ふ因て樫田氏應挙
ふ下繪のこと絹たのむこといひるるこ八速ふ畫ておくるし故即ち

長常のもとゝ持参してらるゝ時ハ長常ハ此ヤ繪ゐてを
得ゐるまゝといひくらいゝたゐるまゝバと問ゐまゝバ我ハほゐさんとて應
挙ハ画の上手なるまゝバ我彫ゐるか彫ゐ世ば其儘書くゐ思き
たゞ彫くせなれバ常ハ直さんと思ハ其癖ば彫らんとゐるを
て難き事なり癖ば直さんとして自ゐ久きのゐるまゝるハ
ゐる所ゐと物語まゝバ樫田氏まの上手の妙なる世感じて
小柄ば彫ゐるまゝこと世止ゐゐまゝ多ゐとぞ

日本扇宋朝ハて稱揚せゐるまゝ事

皇朝類苑風俗雑誌部曰熙寧末余遊相國寺見賣
日本扇者琴漆柄以鵶青紙如餅揲為旋風扇淡粉

畫平遠山水薄傅以五彩近岸為寒蘆衰蓼鷗鷺竚
立景物如八九月間艤小舟漁人披蓑釣其上天末
隱隱有微雲飛鳥之狀意思深遠筆勢精妙中國之
善畫者或不能也索價絶高余時苦貧無以買之每
以為恨其後再訪都市不復有矣　我朝の書唐山ハ
稱揚せゐるまゝこと世ハ既ハ諸書ハいぞて世人の知るゐとゐゐ多ゐ
按るハ熙寧ハ宋神宗の年号　我朝白河天皇の御時し
是巨勢流ゐ或ハ公家又ハ僧阿闍梨などの畫ハてをけゐ
是より以来　我朝の書画又乏しゐゐゐ此一事近世扇面
家と云古書画扇ば集る好事君子の為ハ記るせゐ

賛澤庵といふ事

大徳寺澤庵和尚はかねより讃物多き故時の人讃澤庵といひしよう歌ハ烏丸光廣卿ふ学びて修行の功を積らしがなる時光廣卿異見ふてひらふ歌よむこと致止べらまと禅のいつぬことなりといひ遣ハさまし〳〵返るふ夢窓有庭之癖雪舟有畫之癖愚有和歌之癖と書て其奥ふ古歌ハ人ことふひとつの癖ハなるもの成るまふ由る也古路の道といひやうまし〳〵ハ是より光廣卿を由るて指南し〳〵ると

探幽齋杉戸の畫の事　附賛辞の事

天龍寺塔頭某院の書院相戸の畫探幽齋の筆と稱し李白のこと書て瀑布なし〳〵是ハ嵐山今の戸妻瀬の瀧ふ杉戸向ひし〳〵也その瀧ハ李白が見るさ通ふ書々ふ此院焼て新築となりし〳〵後まさし〳〵く瀧ふ相戸の向ハざるふ妻念といふべし〳〵是ふも畫工の為くこゝろなるべしと云ふ

槐記ふ云雪舟が枯木の枝ふ鷺のとまりて脊ハハ直下し〳〵為る景ふ外ふ河も無し〳〵碧石禅師の讃ふ水清魚見とせ〳〵者為り雪舟が画ふ水をとより水を為なるまハ魚を為し〳〵盥るふかくのぬく濆〳〵為るより見まバいふふ澄潭の清潔なるふ魚の泳ハまる為ハ鷺の見付るふふくを違

ぎ凡そ賛を書くハ心得ゐるべきことなり拙手の賛ハ
畫と重言ハなることを多しとこゝ
右ハ呼起の賛ハして又畫家ハ此用意ゐるべきことなり
先古人一圖ハ命ぎるハ於て畫外ハ意の深きこと察す
譬ハ一花片葉といへども卒然画くハゐるぎ先其情態
ハ思ひ其風致を考へ畫理の變ハ千万無量の想
を積て一図ハ作ぎ是ハ落想とも云へ爲ぎ筆ハ
揮ハざる以前斯のごとく而後繁ハ省き要ハ採て
練熟の手ハして易く畫き出せるゆへハ匆と意ハ
經ざるごとく見ゆまでとも自ら心思獨運趣味厚重

なり方蘭坻曰畫必先立意以定位置と云ひて
も知るべしらの枯木白鷺圖のごとき水魚ハ畫ろ
ざきとも蓋筆前沙汀覓鮮鱗の工夫雪翁が著
想中ハ備り多る事ハ定なるべし去る程妙手の
讃語ハて圖を呼起せしものなりん所謂無聲
詩と称ぎるも物ハ應じて趣向ハ求免貯へ就中
風調ゐる事ハて珎禽奇花切近的當ハその儘画き
出しゐるんとて綵花泥禽ハひとしき程詩意ハ叶へ
とハ云ぐ〳〵且こゝまハ對して妙語の發ぎべき根跡も
なるべし因て名手の真跡ハいるりてハ減筆と繁手

議論せんとも千金を費(ぐとく)益寶賞せらるる
ためなり

因に云畫像の賛に左向の像は賛は左行に書て印は
右に押し右向の像は賛は常のごとく右行に書て印は左に
押すこと多し是は朱子文集の内方伯謨に答る書に
六先生の賛の書様左右の辨あれば其まゝに据きるなりと
先達の説なり臨池家などの考置(べき)なるべし

蕪村翁書畫戯の記

謝蕪村が書画戯の記真蹟は所持せるゆゑ尺餘なれ
ば此書に載せる事は漏に故に文字は縮寫せ

書畫戯之記

我に妻子の眷屬無書畫をもて妻
子眷屬とす
我に朋友無し書畫をもて朋友とす
我に金錢無し書畫をもて金錢とす
我に衣服無し書畫をもて衣服とす
我に家なし田地なし丹青無し書画
をもて家なし田地とす丹青とす
吾遊ぶゆゑに書畫交易をもて
もて遊ぶとす

吾に無師古今此名書畫をもて為師と
吾地獄極樂をもこれ書畫をもこれ
地ここにあり
予天下此法を守りて僧神此像畫
を安置すといへども人て祈る我心解
をもて神佛とす
老七日為食ハ圖も書画此今
長き日を書畫に
遂ひて十二月
鳳凰都於　東巡雅俗亟

守景酔興師画狂媒黷する事

久隅守景号無下齋稱半兵衛探幽齋ふ業狂受て名
手元狂出ること世人の知る変なり常ふ豪放ふして酒
狂嗜こ時世の俠客の一黨もて放逸又殊ふ甚しかる時
探函法印諸侯より三幅對狂命ぜらるるふ常ふ丹青
いとまなくして日限ふ迫まり命のをぐるがごとくふ至て
漸ふして畫成る中八人物左右ハ山水何ぞも秀潤ふて
ことふ奇絶なり未ご落款ふ及ばざるうち狂守景一
日鯨飲の興ふ乗じ来りて彼三幅狂見て大ふ感歎や
まず手狂拍ち奇絶ことよろこび事限なしいつら人の

ひのぐるまに幸と〻揮筆して其山水の山際より男
根に人頭とな〻其行列を醉筆してその儘天向ふ
倒き卧〻軒雷の如く前後も忘れぬ熟睡より折節
この侯より催促の使来りしハ日限の延〻とも〻法印
ひのくるぐるしく落款せんと思ひ〻ふ守景がこのひの様故
大ひふひのきき歎息してやまびよりなく此ゑ我侯ふ上
らきしハ侯ふも守景が人となり我ゑで知りたまひ故
いうふを其男根の行列我見度よ〻命ぜしハ法印やむ
こと我得ず即時ふ持来せしふを醉筆の妙灑〻落〻
として超凡なきハ侯ふも大ひふ感じるひ且悦をなひて

なるゑ不ど名誉の所為奇なることかるゑと作るき其儘ふ収
蔵となり今ふ寶物となきたりとぞ

宮本武蔵畫發明の事

宮本武蔵の傳ハ武藝ふ傳ふ委〻く記せり其餘画事我
能きること我ゑ〻きる者ひのひる時主君より命ゑりて君
の面前ふて達磨を画ゑるふ甚ど拙劣なきハ其日を止ぬ
武蔵夜ふ入り寝卧なのうち夫と工夫して画と夜まふ起き
ひのう燈下ふて画〻ふ意ふ適ひて精妙ふ成まりその時
武蔵門人ふ向て云ゑるハ我画いまど刀術ゑ及ばぞその故ハ主
君の作なきハ成ほどよく畫んと思ふ心より〻却て甚

宮本武蔵之畫

一峨縮写

拙劣なり〳〵今ハ我兵法技以て畫〳〵故ふ是ハ適意の作と
そも〳〵我兵術ハ太刀をもつて立出る時ハ我を忘れ敵を無
く天地技破る見地なきハ恐るゝ事なし〳〵扨て画ハ劒道乃
足本ふをよくまもと語りたるとなん

按るふ武蔵ごとき勇士ふても主君の前ふてハ臆せ〳〵と
見えたり是ハ禄ある也〳〵明時便殿ふ人と技ヲ〳〵て書
を御覧有〳〵事ゆるふ上の威ふ恐まて汗出手顫て
字技なもこと技得ざり〳〵ふ陳復獨り動止安雅ふて
書法端正なりとぞ是武蔵と同日の談なり一友人の語ふ
人多き處ふて八人なき心ふて事技なん屋〳〵人なき處

みて八人多きころみて事をみんべしと云へる八至言といふ

画一

月舟空ふ轉合の句ハ聞く事

續畸人傳卍山和尚の條ふ洞家中興月舟和尚の事ハ載せ

又こゝふ一奇事ハ聞る事ハ月舟若ころ旅遊行して

嵯峨野ふ日暮なきバとゆる菴りふやどり求免しふ主ハ

威厳ある老翁なりしが和尚ふ向ひ禪徒ならバ詩ハ作る

画一一絶を閲うんと云月舟諾して見まいふ獅子菴と

之る額ハ即時ふ賦して云

投宿嵯峨獅子菴半盞清燈語江南

として轉合の二案ふハ時ふ主人聲ハ發して

夜来風雨忽地起紅葉秋成一二三

と附多り和尚ハ感吟して目ハひらき見まい家ふ入

消うせて花ハ多る原中ふひとり坐し多り古の都良香の

羅生門の詩をかゝる類ひなやと吾山公翁が記ふ見へこゝまハ

月舟が若ころし時なのまバ坐禪の外魔の侵しこるふやハのん

蠹雪魚の印の事

長澤蠹雪名魚字水計淀の藩士なり應挙の門人とゝろ

て毎朝淀より京師罷條の應挙が宅へ通ふことなりハのる時

寒氣甚しく通路の小川氷りて魚生中ふハのり一身とぢ

て浮游せ得ぎいとくるしげなる形状あり蠱雪是を憐みて
飯ひ給へとあるを人ども氷わりていくんとをもぎきよりあり
そのまゝ京ふ登り應挙が家ふ在てその晩景帰路ふ及
ぶ頃かの魚を見しふ朝ふ入りて氷澍ふ解ける魚乃自
在を得てよろこぶ形ひのを思ひ翌日此を絵應挙ふ語ら
きしふ應挙が云真ふ面白き話なり我が畫ふもかくの如く
師ふ従ひて学ぶこと年ひのを生涯艱苦の作行つゝを澍と
氷の多る絵得るがごとく今ハ画の自由絵得るありと思ふ
ひのを各このころ得ひのるべきぞと蠱雪其為絵さとりてそ画
より模寫縮寫の工夫つゝ法式丹青設色の工夫鍛煉し

て俗絵さり邪道絵得べきこゝろ怠ぶ遂ふ名手とハなのれり
此故絵以て水の内ふ魚の字の印絵用ひ名とせしとそ惜む
蠱雪四十歳ふ至りぞして没をひる人蠱雪が畫ふ細密
なる絵見び描こと絵得ざるやといふ絵きして苦雪方すの
内ふ百鳥絵畫きしふ真ふ應挙ふ劣らぬそ歎息せ
とぞみひのる時思ふことひのりて師より請る変の画手ふ絵
そのまゝ拵ふして應挙ふ真しに絵とつふ是ハひのきぞと
てかゝる夏きし故蠱雪ひのるに清画して再び直し絵とハ
きしふハ是りて美きひのるまでそ此ふおりて破門をも

外國人假名絵覚えし事

清人韓人琉人その外海外諸國の人和歌あるいは詩ぎ事長崎潮見録琉球談紅毛雑話などに載せて人の知る所なるこゝに寛政の初船来せし孟涵九なる者殊に日本好みて容體はもとより作りとて去る巳ばかり和語はもとより假名はもとより書こと精妙なり兎角江戸の地口といふものにこゝにあるべし

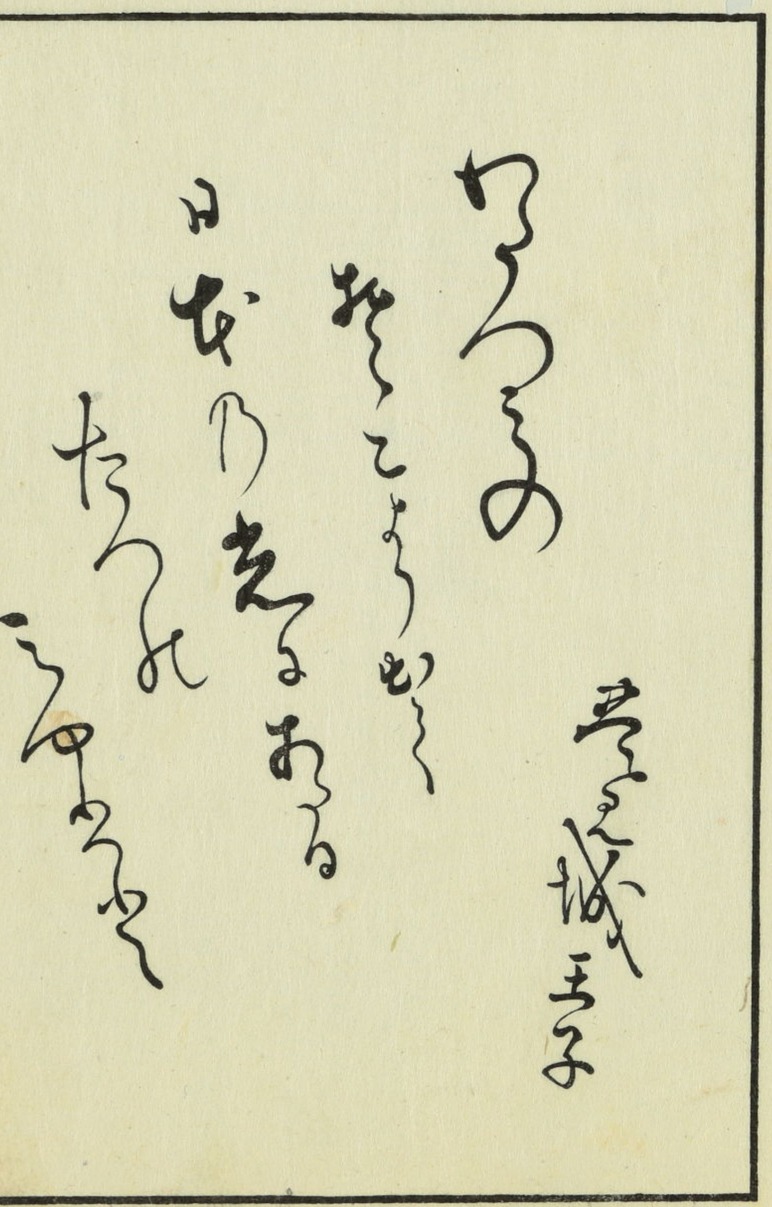
なるべく書やこの加名字まづ今唐土書の俗名

茶釜がたゝかかふどまつ埋

茶釜に解蟲はえ画きて

又琉球人の歌

讀谷山王子朝恒



鏡山

くもりなきゆ代の鏡の山なれハ君ゆゑ世の影をうつす

伏見の里ゆて

たまをゝくさ〳〵きえの草枕ひとり婦人この夜ゆの月影

不二の山城

人とゝいとこゝ人とゝの業をもゝ及ハぬうゝの雪乃白ぬ

右の俳種〳〵ゆきとゝふ略〳〵ぬ

近世名家書画談二編巻之二畢